

手筒花火は愛知県東三河地方を中心に伝わる花火で、450年以上の歴史があり、豊橋市の吉田神社が発祥といわれています。揚げ手が花火の筒を脇の横に両手でしっかりとつかえるように持ち、巨大な火柱を噴出させ、最後に「ハネ」と呼ばれる炎が、大音響とともに足元に噴き出す勇壮な煙火です。

紅葉台



新聞

第124号

2024年
4月6日

発行人：関谷 孝

手筒花びなを創作

小幡 節子さん

小幡さんは、紅葉台にすんでいましたが、今は郷里の愛知県に引っ越しています。かねてより、「ひな人形づくり」にとっても意欲的で、四姉妹で作品展をしていることは風の便りに聞いていました。今回、そのことについて投稿していただいたのでご紹介いたします。



私たち四姉妹が吊るしひな飾りに関わるようになったのは、私に思わぬ臨時収入があったことがきっかけです。さて、何に使おうかと考え付いたのが四姉妹での旅行でした。二番目の姉の希望で2泊3

日の旅にしました。1泊目は私がかねがね泊まっていたと思っていたところです。二人では割高なため四人ならよいかと即決。2泊目の宿に迷っていたとき JR の稲取温泉のひなの吊るし飾りのポスターを見付けました。二人の姉が布に関わる趣味を楽しんでいたのもいいねとすぐに決定。



この旅行で姉妹みんなに予想以上に喜んでくれました。今回の旅行では、吊るしひな飾りのルーツなどを知り、私たちも勉強しようということになりました。翌年からひな人形で有名な九州・柳川、秋田・酒田と研修旅行と銘打ってでかけました。その酒田の会場が素敵で責任者の方に、市から無償で借りている話をうかがいました。すぐ、姉に私たちのふるさとにある豊橋市二川宿本陣資料館に展示依頼に行ってもらい、半年後に許可をいただきました。以後、資料館側の希望で15年もつるしひな飾りの展示に関わってしまいました。

吊るし飾りはとても好評で、二人の姉が地元の方々にボランティアで教え、制作者を育てていきました。その後、私たちは他所には無い展示をかんがえました。その最後の作品が「手筒花びな」です。



豊橋を含む三河地方は手筒花火が昔から有名です。この花火は揚げる人が全ての工程を一人でおこないます。筒にする竹を伐採に行ったり、縄をなったり、火薬を詰めたりと自分が揚げる花火は自己責任でつくりまします。火の粉を浴びながら各町の神社に奉納するのが目的の花火です。近年は観光目的の手筒花火大会も開催されています。

そこにヒントを得て、打ち上げ後の空筒を再利用して菊人形風に吊るし飾りのパーツを付けてひな



人形に仕立ててみたらどうかと皆に提案しました。顔を私が担当してくれるならOKということになりました。顔の材料は、芯に発泡スチロール球、面長にするために面綿で補正して幅広の包帯で包みました。髪は内裏様、三人官女は黒布で、それ以外は黒・白色の木綿糸です。顔は貼り付けてあります。各々の個性ある表情を作るのに苦労しましたが、終えて見れば楽しい時間でした。付属の小物も皆、担当者が作りました。



天井からぶら下がっている本来の吊るし「七宝まり」は300個ほどあります。準備の段階では400個あったのですが、人形の背丈があり、長いものがうるさく見えるので除外しました。写真では分かりにくいですが、床に転がっているのは手毬です。人形が重たいため、動かすたびに床に敷いてある赤布に皺ができるので、それをカモフラージュするために置いたものです。

内裏様が一番大きい筒を使用したので私の背丈（160CM）近いものです。15体が揃うと迫力があります。豊橋市報の表紙を飾った年もあるように聴いています。命名者は私です。手筒花火+ひな人形=手筒花びな。何か言われるかと思いましたが、クレームはいまだに届いておりません。つるしひなに心惹かれ、それをつくるうちに新しい郷土のひな人形づくりへと興味が広がりました。ひな人形は、子どもが健康で幸せに育ててほしいとの願いが込められています。人々の願いを込めてつくるひな人形は私たち姉妹の生きがいにもなって心豊かにさせてくれています。

粕谷会長の観察日記



多摩川に珍鳥のシノリガモが来ているというので行ってみました。場所は、日野市で中央線鉄橋の下流側。通常、冬は海の荒波を潜って暮らすこのカモがなぜ多摩川に

現れたのか不思議です。シノリガモは、色鮮やかな模様を持つカモで、顔から体に大小長短の白色斑をいくつも持っているカモですが、本日はお休み中で顔を見ることはできませんでした。後ろはオナガガモのカップルです。



ヤマハノキの花です。場所は、八王子市宇津貫緑地。大きく房状に垂れ下がっているのが花粉を出す「雄花」、小さくて赤い芽のようなものが「雌花」黒っぽくて小さな松ぼっくりのようなのが「昨年の実」です。「風媒花」なので、花に色彩はありません。ヤマハノキの実にはマヒワなどの小鳥が集まって種を食べます。

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」のHPに公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。